



「天神林町 山寺水道・水神様」

※私有地につき入ることは出来ませんが、掲載は許可を得て写真撮影をしました。

## 水の思い出 66

小説『光圀伝』が人気を呼んでいることもあって、今回は光圀公ゆかりの「山寺水道」を訪ねてみました。約25年以前に日立市から当市へ移り住んだ私が、山寺水道を知ったのは、現在所属している「常陸太田まちかど案内人の会」を通してです。江戸時代の延宝5年（1677）、光圀公は母の菩提を弔うため稲木村宮ケ作に久昌寺を建立しました。しかし地盤が岩質で飲料水が得られず、裏山の沢水を樋管通水して使用しておりましたが、その後、居住するお坊さんの人数が増えたこともあって、飲料水不足になりました。そこで光圀公は鉾山技師の永田円水に命じて山寺水道を建設させました。全長約2キロメートルに及ぶこの水道は岩盤をくり抜いたトンネル式水路で、その水源を隣接する天神林台地の地下水に求めました。

現在、天神林町の人々に“天神様”と呼ばれ、観音石像が置かれているこの辺りが山寺水道の水源地の一つと見られています。もとは三叉路中央に塚があり如意輪観音水神塔が祀られていたそうです。

この天神林台地は又、佐竹氏発祥の地でもあります。近くには佐竹氏ゆかりの馬坂城跡や国指定重要文化財の佐竹寺があります。さらには古社として知られている稲村神社があり、神明造りの美しい本殿が印象的です。見どころが盛りだくさんのこの地を、どうぞ皆さんも一度訪ねられ、歴史と向き合ってみてはいかがでしょうか。

(原田 静雄)



# 常陸太田の城跡

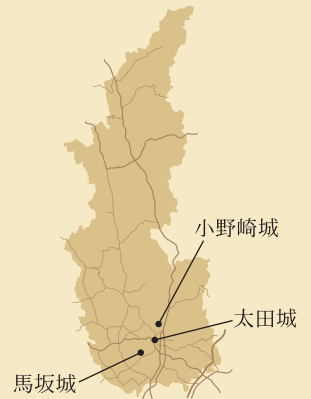
(鴨志田 弘子、原田 静雄、高橋 靖浩、武藤 卓)

## 小野崎氏と三つのお城

市内天神林町の梶山義光さんを講師に迎え、馬坂城、太田城、小野崎城についての講話をして頂いたので、その一端を紹介します。

太田城と佐竹氏の関係が主でしたが、私達が特に興味を持ったのは小野崎氏の生き様でした。小野崎氏に注目し、歴史の柱として中世の城を見ていきたいと思えます。

佐竹氏と小野崎氏の間には、不思議に思える点があります。小野崎氏は馬坂城、太田城、次に小野崎城と建て、次々と佐竹氏に城を占領されたといわれています。何故か、佐竹氏を良くは思わないはずの小野崎氏が、佐竹譜代の中でも非常に重要な位置にあり、佐竹傘下の宿老（守護代）で要職を勤めていたと云われています。



## 1. 馬坂城と小野崎氏

場所：天神林町字御城 みじょう

太田城主通延は、佐竹氏初代昌義に、馬坂館を攻められて館を奪い取られ、次に、佐竹氏が太田城攻略の準備に入ったことを知り、これに恐れをなして降伏したといわれています。さらに降伏の証としてわが子関姫（当時十六歳）を人質として昌義に差し出しました。昌義は関姫を側室として馬坂城に住ませましたが、関姫は屈辱に耐え切れず古井戸に入水して果て、現存する五輪塔は昌義が供養塔として建てたと云われています。

上述のような争いごとは無かったとの説もあり、祖父（義光）の地に入った昌義が馬坂館を築いたという説もあります。



① 馬坂城跡碑



天神林お宝マップ（歴史の古道めぐり） 天神林お宝さがし実行委員会作成 問い合わせ先：常陸太田市生涯学習センター



② 観音山と観音寺跡（のち佐竹寺）



③ 佐竹寺



④ 稲村神社



## 2. 太田城と小野崎氏

場所：中城町内堀町栄町

太田城は、<sup>さかのうえのたむらまろ</sup>坂上田村麻呂が築いて、第七十二代白河天皇の御代に、さらに<sup>ふじわらのひでさと</sup>藤原秀郷の五代目の子孫<sup>みちのぶ</sup>藤原通延（天仁年中）が隣国下野から此の地に来て、太田太夫と称し、現在の中城町に館を築いたという説もあります。

太田城主太田太夫通延の子<sup>みちなり</sup>藤原通成は、佐竹氏より城明け渡しの要請を受け、力関係に大きな差があるためこれを受け入れたといわれています。佐竹氏が太田城に移った時期は治承年間と云われています。

その後、佐竹氏が南側内堀町に二の郭、北側中城町・栄町に三の郭と北ノ郭と次々と築城し、又土塁を高くし、濠を深くして此の太田城に入城したといわれています。



太田御殿の正門（明治初期の尋常小学校記念写真 立川久泰氏所蔵）



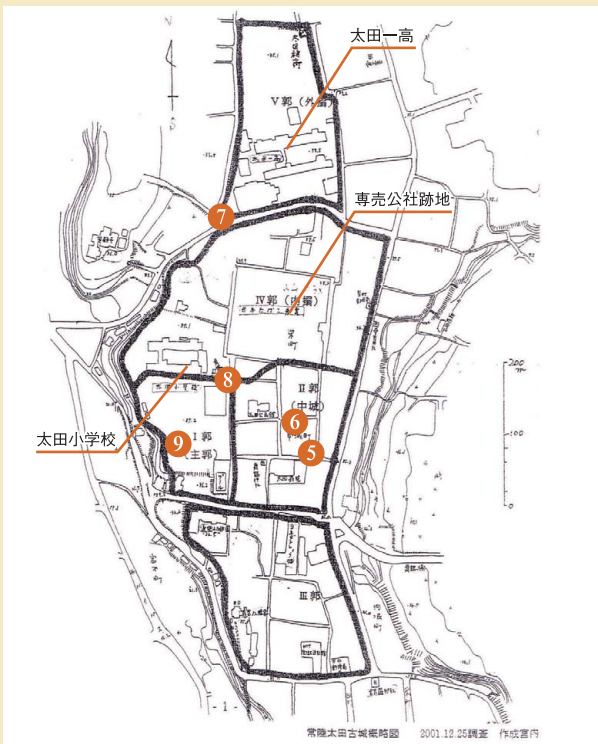
6 太田御殿の正門があったと云えられている付近の石積跡？



5 ここに太田御殿の正門があったと云えられています



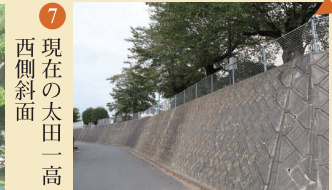
旧太田中西側斜面（大正10年頃 立川久泰氏所蔵）



常陸太田古城概略図 出展：太田市史



8 太田城跡碑（太田小学校）



7 現在の太田一高  
西側斜面



9 現在の太田小  
南側の斜面



太田小南側の斜面（大正6年頃 立川久泰氏所蔵）



### 3. 小野崎城

場所：瑞竜町字小野

太田城を明け渡した通盛（藤原通延の孫）は、瑞龍町の小野に後に小野崎城と呼ばれる城を設けて移り住みました。以後姓を小野崎と改め佐竹氏の重臣として、永く服属し、佐竹氏が秋田へ移るときにも同行したといわれています。

小野崎城は十代目小野崎通胤が佐竹氏の北方の守りを強化する政策により、多賀郡十王町友部の櫛形城主となって転居することにより廃墟となりました。

小野崎氏は佐竹氏譜代の中でも常に要職の位置にあって宿老、守護代等を勤めていました。また庶子家の石神小野崎氏や額田小野崎氏、小野崎氏の分流である茅根、根本、赤須氏など佐都荘内に大きな勢力を持ち、その体制を確立したと云われています。

名門藤原家の流れであり、多くの分流、諸子家を持つ小野崎氏が、後から移り住んできた佐竹氏の家来であることに、どういふ想いがあったのでしょうか。現在の私たちでも、小野崎氏が佐竹氏へ良い感情をもっていたとは考えられません。まして、同じ時代の佐竹氏と対抗する勢力から見ると、小野崎氏は条件さえあえばきっと寝返る可能性が高いと思えたことでしょう。今年の3月、そんな想いを強くさせる発見がありました。佐竹氏と永く争っていた伊達氏、その当主伊達政宗からの額田小野崎氏



小野崎城跡石碑（瑞竜中学校）

への密書です。内容は主君の佐竹氏を裏切ることを促すものでした。密書を受けた後も、額田小野崎氏は佐竹氏を裏切ることには無かったといわれています。しかし、伊達氏につくつもりがないのに、そんな物騒な密書を永く所蔵していたのか、とても不思議に思います。

数百年も前のことではありますが、ここには命をかけて家や土地を守った人々が生きていました。そんな人々に想いをよせるのも歴史の楽しみのひとつだと思います。

（高橋 靖浩）



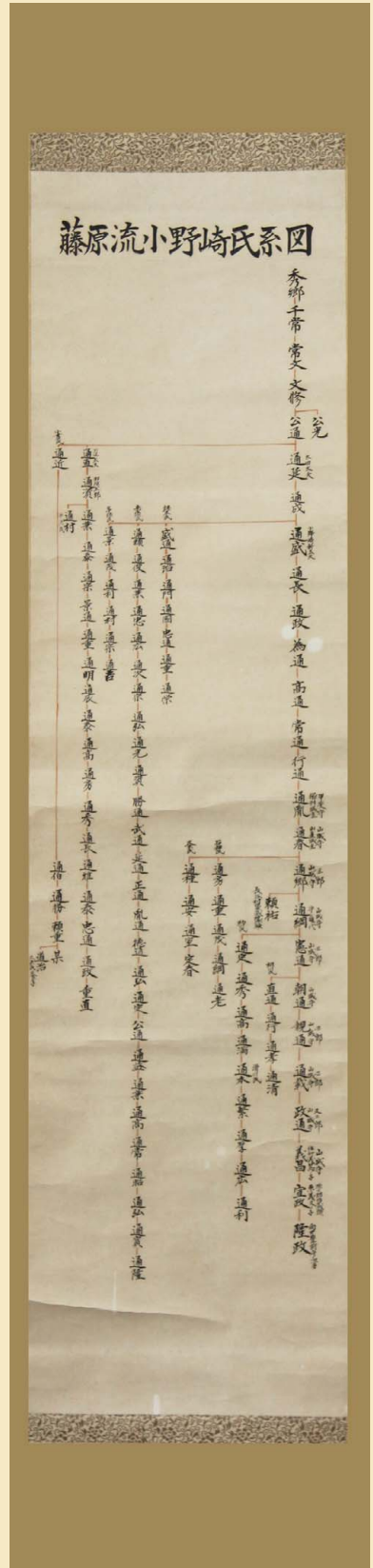
小野崎城復元想像図



読売新聞2013年3月25日号



小野崎氏の家紋：左二つ巴（藤原北家秀郷流）



小野崎氏系図掛け軸（瑞竜中学校蔵）

# 原点 回起 4

## 「鯨ヶ丘」

25年ぶりに、常陸太田に戻り、地元のイベントを調べようとネット検索をしたところ、情報が少なくちょっと驚きました。

Webに関する仕事に携わっていたことから、自分でできることで常陸太田の情報発信手助けができたらと感じました。

私が小学生の頃、学校からの帰り道にバスを使わずに、友達と鯨ヶ丘商店街を歩いて帰るのがとても楽しみでした。そんな鯨ヶ丘の商店会からの依頼で「鯨ヶ丘」Webサイトのリニューアルのお話をいただいた時、考えていたことが実現しとても嬉しかったです。この思い出のある鯨ヶ丘の街をもっともっと色々な方に見てもらいたいと思いました。

「鯨ヶ丘」Webサイトでは、最新のイベント情報はもちろん、商店街にはどんなお店があり、店主さんはどういう方なのかなど、紹介するページを作りたいと思い、一軒ごとに廻って写真を撮らせていただき掲載しています。最終的には、鯨ヶ丘商店街の全部のお店を紹介するのが、自分の夢です。

遠方にお住まいの方はもちろん、地元の方も鯨ヶ丘のWebサイトをご覧くださいいただければ…と思います。

(武藤 卓・千絵子)



「鯨ヶ丘」Webサイト <http://www.kujiragaoka.com/>



「なべや」さん、店主夫妻と店内の様子

## 子育て奮闘記

# 踊るママパラダイス 65

看護学校の寮にいる長女のスマレから、風邪をひいて熱があると聞くと心が痛みます。すぐにも顔を見に行きたいところですが、そうする訳にもいかず心配するばかりです。この先一人暮らしを続けていくからは具合が悪いときは自分で何とかしなければならぬのは当然のことです。ひたすら早く治るように祈ります。

つい先日熱があると言ってきました。水分と栄養と休息を取ってと言う私に、スマレはそう言うことを聞きたい訳じゃないと抗議しました。彼女の言い分はこうです。「長い実習を終えて次の実習までホッと一息つける3連休に熱を出してしまった。こう言うことは初めてではなく前にもあって私はついてない。」

実習中大変な思いをすることは私にも経験があるのでよくわかります。予習と毎日の膨大な記録物。教官や先輩看護師とのやりとり。自分の受け持ち患者さんの経過をたどりながら自分にできる看護を実践する。毎日疲労と緊張とで、くたくたになりながら、あと何日と指折り数えながら懸命に取り組みます。その実習の切れ間の休日にホッとして、かえって体調を崩したのでしょうか。

私はそれでも早く良くなってと繰り返します。時にはカミナリも落とすけど子どもは宝物だから元気でいて欲しいです。

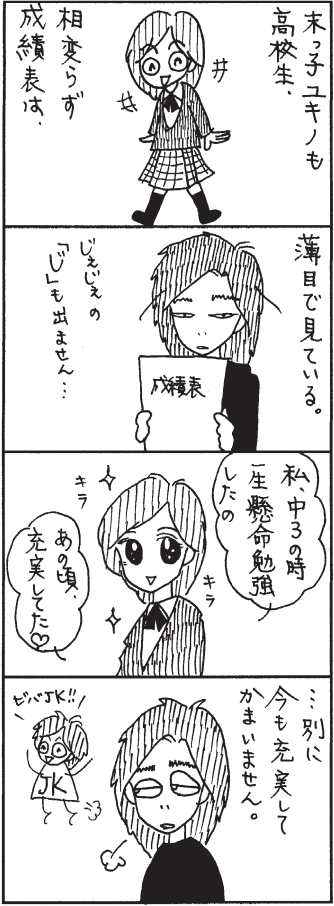
「頑張ったんだね。」と言うとやっと気持ちが収まったようで「いつもこんな調子で嫌になるよ。」と愚痴るスマレ。

でも、思い返すと楽しんできた修学旅行や本人なりに努力した受験。いつも元気にやってきたじゃない。頑張った人には後でご褒美があるというのが私の持論。その「後で」はすぐではないかもしれませんが、必ず「後でのお楽しみ」はあります。

話を聞いた後でスマレ宛に送る宅急便は、すぐに食べられるお手軽な食品と体を温める物。いろんな思いを込めて品々を選ぶのは私の楽しみです。どうか元気にやっってください。

—— わいわいネット 織田 裕子 ——

## いつでもどうぞ





百姓母ちゃん農日記 12

もんぱ便り

『身につける仕事』

ごはんを作るとき、今日は〇〇にしようかな？と考える。それは大体その時畑に沢山ある野菜の名前。今日は大根！とか、今日はかぼちゃでいこう！という、子どもたちは怪訝な目で見て、「…で、何作るの？」と返してくる。しかし、私のメニューは作りながら自在に変わってゆく行き当たりばったりレシピ。あるもので、ある材料で作れるレシピを頭の回路で検索して、ぴびっと作ってゆく…。という、何ともお料理上手に聞こえるが、結局、忙しい中で作るのは自分の頭に入っている料理。あるものを現場合わせで組み立てながら、終わるまで何ができるのかわからない。

料理本やレシピ検索が全盛の世の中だが、それは料理のほんの入り口か、参考くらいにしている。新しい道具やレシピは取り入れつつも、それを一度自分の中に落とし込んで、すんなりできるレシピが、一番生きているレシピ。その野菜や素材を見て、作りたいものを決めて、それを目指して材料と調味料を選びながら、模索して作

ってゆく中で、いろいろなレシピの引き出しを開けたり、閉めたり、いろんなエッセンスを取り入れながら目指す料理に向えば、こんなに楽しいことはない。失敗も沢山するけれど、できてからみんなで食べる時の「おいしい！」を目指して、作り続けるからこそ身につく料理もあるのだ。

畑仕事でも最初は見よう見まねでやってゆく。繰り返して同じ仕事をしてゆくうちに、この作業はこうやって、どのくらいの幅でこんな感じに植えて、といった事が、感覚的にできるようになる。すると、作業の効率はあがり応用がきいたり、対処できるようになる。それはやはり、仕事を身につけるといことであり、身につけたことの多さと、その人の生きる力は比例しているように思う。手間暇惜しまず働いて、身につくものを増やしたい。

(布施 美木)



人種会系団

3

第3回目となる在来種の紹介は、金砂郷地区赤土町が発祥の「常陸秋そば」です。現在、茨城県内に限らず、全国で栽培されています。金砂郷在来の特性の香り・風味・甘味を維持し、粒揃えなどの品質が保たれているのは、発祥の地、赤土で種子が栽培され続けているからです。赤土町では、平成22年度から「常陸秋そばの郷まもりたい」という地域コミュニティを立ち上げ、地域全体で常陸秋そばの「郷」を守る活動を行っています。代表の関清一さんは、「同じ種を使っているけど、品質は土地によって違う。赤土は粘土質。赤土内のほとんどがかつてはタバコの裏作としてそばを作っていたため、土地が肥えている。」と語ってくれます。

現在でもタバコの栽培を続けている海老根克己さんは「現在タバコを作る人は減っている、タバコは2人以上いないと作れないので、難しい。けれど、やはり土を維持するのは大切。たとえば、大根も土地に合わない辛い。赤土で作ると甘くなる。土地に合わせて農作物はできる。」と話してくれました。

香り・風味・甘味の評価が高く、目で、鼻で、舌で楽しめる、数少ない常陸秋そばの「郷」を守る姿が赤土にはあります。

たねつぎびと かい (種継人の会 白石 百合乃)



常陸秋そばの郷守りたい主催の「収穫祭」にて



〔在来種データ〕

名称	常陸秋そば
品種	そば
特徴・性質	一粒の重量があり、粒揃いが良く、品質も優れているのが特徴。他品種と比べても香り・風味・甘味の評価が高いそばです。目で、鼻で、舌で楽しめる。
収穫時期	10月下旬～11月上旬
食べ方	めんつゆ、けんちん汁につけて食べる。そばがきなど

リレーエッセイ 「思い出の絵本」

『幼年偉人ものがたり』

～66～

(幡町 菊池 祥行)

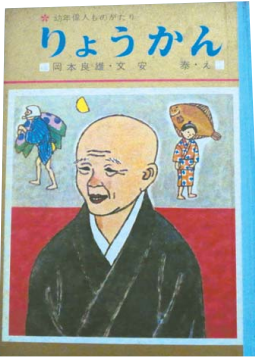
私の記憶では、いちばん最初に父が買って来てくれた本が、12冊セットの幼年偉人ものがたりだったと覚えています。

40年以上前の本です。今のようにカラフルな挿絵でなく、墨絵のような白黒の絵で「思い出の絵本」と言うにはあまりにも地味な『絵本らしくない』本で、福沢諭吉や野口英世、良寛などやエジソン、ナイチンゲール、リンカーンといった偉人の伝記です。

小学3年生だった私は、珍しくて毎日とっかえひっかえ読んでいたのを覚えています。

この原稿を書くために実家の本棚から数十年ぶりにこの本を引っ張り出し、父に話をする本を買ったことなど全然覚えていませんでした。もの心ついたときにはパソコンやゲーム機が身の回りにあり、塾や習い事などで忙しい今日とは違い、電子機器もなく、外で遊ぶ年代の私にとって、すごく嬉しいものでした。

家に持って帰り、改めて読み直してみながら子供にこの本の話をして「へえーそうなんだ。」というだけでしたが、私にとっては懐かしい大事な『思い出の絵本』です。



ほつとひといき

マツムシ



昔から、「チンチロリン」という雄の鳴き声がすてきなので、スズムシとともに親しまれてきたコオロギの仲間です。唱歌の『虫のこえ』にも歌われていますが、実際に本物の声を聞いた人は少ないと思います。スズムシはペットショップなどでも販売されているように飼育が簡単なのですが、

マツムシは飼育が難しく普通に売られていません。それに加え、生息地であるススキの草原が少なくなり、野外での数も少なくなっています。マツムシの実際の声はイメージ以上に大きな声です。ススキ原の根元近くを探し声を聞いてみませんか。

また、仲間に、アオマツムシという昆虫もいますが、こちらの種は、100年ほど前に外国から入って来た外来種です。数十年前から急激に分布を広げて、今では市内の街路樹や庭で「リーリーリー」という大きな甲高い声で鳴いています。(佐々木 泰弘)

ちよつとひといき

DANRAN SHUKA 「なごみ家」

店主の川上さんが、「旨い酒と料理があって、働いている人が輝いている、そしてなによりも、お客様が笑顔で楽しんでいる空間を創りたい」と決心したのが22歳の時。そして、十数年がたった昨年の7月、DANRAN SHUKA「なごみ家」が馬場町にオープンしました。

お店の一押しは、子どもからお年寄りまで皆が大好きな鶏の唐揚げ「太田ザンギ」です。

「皆をなごみ家の唐揚げで笑顔にしたい。」そんな川上さんの想いでいっぱいなのなごみ家さんには、店主とスタッフの元気な笑顔とお客さんのおいしい笑顔があふれていました。(五十嵐 弘)

- 営業時間 ランチタイム : 11:30～15:00  
居酒屋タイム : 17:30～23:00  
(金・土は24:00まで)

- 定休日 日曜日
- 住所 常陸太田市馬場町85-1
- 電話 0294-51-2046
- 太田ザンギ定食…680円～  
その他ランチメニュー  
10種類以上



太田ザンギ定食 (5個)1,000円

生涯学習情報誌「フォンス」は、2～3ヶ月毎に発行し、市内全世帯に配布され、大きな宣伝効果が期待できます。ぜひご利用下さい。

◆広告料(1回あたり)※会長が指定するページの最下段

- ① 縦4.5cm×横 8.8cm/10,000円
- ② 縦4.5cm×横17.9cm/20,000円

フォンス・ネットワーク事務局(生涯学習センター内)  
問合せ TEL:0294-72-8888  
URL:http://edu.city.hitachiota.ibaraki.jp/gakushu/

広告



# 新太田点描 ④

## 平福百穂と太田ちまき

昭和六十三年春、五月の連休を利用して秋田県角館町を訪れた。目的は、太田・里美地方と仙北角館地方の関係に繋がる何かを捜すことであつた。三泊四日の滞在時間はアツと云う間に過ぎてしまった。

里美へ帰る日の午前中に、当時開館したばかりの「平福記念美術館」を見学した。この記念館は角館出身の日本画家平福百穂の業績を顕彰し併せて地元角館に縁のある画家達の作品展示もするという。オープン記念で平福穂庵・百穂親子展を開催していた。

父穂庵（弘化元年～明治二十三年）、子百穂（明治十年～昭和八年）は両者共に秋田では日本画家として著名である。特に百穂は東京美術学校（現・東京芸術大学）の教授を勤めているが、それと同時に正岡子規門下の有力なアララギ派歌人の一人として、茨城を代表する歌人で小説家の長塚節とは特に親しい間柄であつた。

何気ない足取りで展示物を眺めて行くうちに、ガラスケース内の一冊のスケッチブックが目にとまった。無造作に広げられていた部分には、鉛筆でスケッチされ部分的に彩色された三ヶのチマキが描かれていた。覗きこんでよく見ると「太田ちまき 八ツ十銭」と読めるではないか。

「太田ちまき 八ツ十銭」と読めるではないか。

太田で紹介したいとの思いから写真複写をお願いしたが、「開館したばかり」という理由で許可されなかった。（下段の写真参照）

あれから二十五年、ズーと記憶の片隅にあり続け、機会があればとの思いがヤツと実現することができた。

さて、課題はここからである。百穂はこのチマキを何処でスケッチしたのであるうか。常識的に考えるならば、当時の太田町内の一般商店か土産物屋ということになるう。もし土産物から土産物屋というところになるう。

では、何時このチマキは描かれたかということになる。百穂の没年は昭和八年であるからそれ以前である。と同時に八ツ十銭という値段も手がかりになる。さらにチマキを結んでいるイグサの結び方も気になるところである。これは現在でもチマキを販売しているお店を訪ねるしかない。

モーター一つ、百穂はなぜ太田を訪れたかということである。目的を推察するに画家としてならば画題捜しの旅、例えば西山荘や水戸八景の山寺晚鐘や太田落雁、奥久慈の山趣等が挙げられる。それは百穂が、大正四年に小川芋銭ら画家仲間八人で珊瑚会を結成して作品発表と情報交換の場としていたので、太田地方についても関心をもっていたと思われるからである。

方や歌人としての太田訪問ならば、やはりメインは西山荘あるいはこれにプラスして奥久慈山々の景ということになるうか。

ここで一つ気になるのが太田地方における長

塚節の足取りである。節は塩原温泉への湯治旅行の途中に太田に来て西山荘を訪れ、そこから天下野街道を通り袋田の瀧などを見物して目的地に向かっている。もしかしたら歌人百穂は節の足跡を意識していたのかもしれない。

もし出来得ればアララギ派歌人としての百穂の詠歌を丹念にあたり、太田地方を詠んだ、或いは太田地方で詠んだ和歌等が確認でき、その年代が判明すれば、このスケッチの描かれた年代特定の有力が手がかりとなるう。

これは私にとって息の長いテーマになりそうであるが、一枚のスケッチ画が結んでくれた仙北角館と太田地方の縁でもある。（吉成英文）

